

— 上智大学 —

2月5日 法・総合人間科・文学部 国語

解答

□

問一 c 問二 d 問三 c 問四 b 問五 d

問六 c 問七 a 問八 d 問九 c 問十 b 問十一 a

□

問一 b 問二 a 問三 c 問四 c 問五 K : c L : a

問六 c 問七 a 問八 d 問九 e 問十 b

□

問一 1b 3a 4b 問二 d 問三 a 問四 c 問五 a

問六 c 問七 d 問八 a

その他の大学・学部の解答解説はコチラ！

[増田塾 2019 解答速報ホームページ](#)



早慶上智・GMARCH・関関同立などをはじめとした難関大学の解答解説を随時公開していきます！

解説



※説明の際は本文全体を通しての行数で「〇行目」というように説明箇所を示していく。この大問本文は全 51 行となっている。

問一 傍線部 1 にある通り「雰囲気や居心地といった世界を感受」と言っているのだから、本文中での痛みは本人が感じる物理的な痛みではない。また「反省的意識」の意味も必要。よって正解は c である。a は「反省」の意味は出ているが、周囲からの「視線」が痛いのであって、本人が感じている痛みではないので×。b は物理的な痛みである時点で×であり、「反省」の意味も出ていない。d も本人の感じる痛みではなく、「反省」の意味も出ていない。

問二 11～12 行目を読めば「君が痛いのを君はどうしてわかるのか」という問いに対する答え方についての設問とわかる。問われているのは「どうして」すなわち理由なのだから、この問いに正しく答えるなら、因果関係を用いて「理由」を答えなければならない。しかし傍線部 2 直前に「～同じ意味である」とある。つまり「理由(因果関係)」を答えなければならないのに、問いと「同じ内容(イコール)」を答えてしまっているから「全く説明になっていない」のである。この論理関係を正しく説明しているのは d のみで、これが正解である。d のように「同じ内容」を答えてしまっているのが「理由(因果関係)の理解がそれ以上深まらない」のである。a と b は論理関係の説明になっていないので×。c は「論理的に破綻」の箇所が×。「私は痛い」と「私は感じる」は「同じ意味」であり、理由を問われているのにそれに“応答しないこと”を「全く説明にはなっていない」と言っており、「論理的に破綻している」ことを言っているのではないので×。さらに言えば、論旨から考えても、「論理的に破綻」はしていない。

問三 傍線部 3 直後 15 行目より「人称代名詞が指示している対象」が重要なのではない、とわかる。これで a 「誰が感じている痛みであるのかという点こそが本質的な問題」は×、b も「人称」に焦点を当てている点で×、とわかる。では傍線部 3 は、何を重視しているのかというと 21、22 行目にある通り「痛みを感じたのであれば、実際そこに痛みがあった」という内容である。よって正解は c である。d は「誰にとっても同様に痛い」が 25、26 行目に反するので×。

問四 傍線部 4 の「(私の痛みの)真偽の検証方法」については 20～24 行目に書かれている。「私を感じた痛み」は 21 行目にあるように「検証するまでもなく直接に明らか」なのであるから「痛みがあることが前提」である。選択肢の中で「痛みがある」ことを前提にしているのは a、c、d である。よって「適切ではない」のは b であり、これが正解。「思い違い」であれば「実際には痛みではなかった」という意味を含むので不適である。23、24 行目「痛みを感じたのに～存在しなかった(=思い違い)」「というようなことはありえません(=否定)」という部分も解答の根拠である。

問五 傍線部 5 は「痛み」の説明であるが、この「痛み」は 19 行目「視覚や聴覚」と対比されている。そしてその「視覚や聴覚」は「対象知覚(19 行目)」である。ということは傍線部 5 の「主客未分」とは「自己と他者が未分」＝「主体と客体が未分」ということだと判断できる。よって正解は d である。この「主客」を、a は「痛みの感覚と痛む箇所」としている点で×。22、23 行目でも「痛みの部位が判別し切れなかつたり～というようなことはあっても」とあるので、ここからも a は×と判断できる。b は「主体と客体が同一」という意味になってしまうので×。c はそもそも、何と何が「未分」なのか、に触れていないので×。

問六 傍線部 6 後半に「色の世界が一人ひとり違うという確信に結びつくことはありません」とある。つまり「自分と他者が違うはずだ、とは言い切れない」ということである。この「違う」という内容を明示しているのは b と c で、この 2 つが正解候補である。a は「他人もそう(＝同じ色を見ているかどうかわからない)思っているかどうかはわからない」が、d は「そのたんなる思いが他人についての確信となることはない」が、ともに「違い」を明示していない点で b、c よりも劣り×。b と c であるが、傍線部 6 の「自覚～確信～ありません」という表現をみると、b の「想像することもできない」は「確信～ありません」と合わない(「想像」と「確信」は異なる)。c の「言い切れない」のほうが「確信～ありません」と意味の上で近いので、c が正解である。

問七 傍線部 7 の「痛みによる孤立感」はその直後、33～40 行目までに説明されている。b は 39、40 行目に、c は 33 行目に、d は 34、35 行目に該当する説明箇所があるので 3 つとも正しい。a の「小さな」の部分だけが本文に書かれていない内容で×。a は「孤立感」を「自分の存在の小ささ」と捉えてしまっているので、内容的にも×。よって「適切でない」選択肢は a で、これが正解である。

問八 傍線部 8 直前の 35、36 行目を見ると、35 行目に「その不快な感覚(＝痛み)から逃げ出そうとして意識を別のことに集中」、36 行目に「痛みは～意識をそこへと向けさせる」とある。つまり「痛み(＝感覚)」と「意識」は別物であり、「痛みの感覚」が「意識を痛みへ向ける」(因果関係で示すと「感覚」→「意識」)と言っているのである。この内容に最も近いのは d で、これが正解である。a は「そのまま」が×。「そのまま」としてしまうと「感覚」と「意識」が同じ内容(イコール)になってしまう。c も同じ理由で×であり、そもそも b と c は「意識」→「感覚」となっている時点で×。

問九 傍線部 9 の「不満」は、直前より「こんなに痛いのに誰も分かってくれない」ことへの不満である。そしてその「不満」は「痛み」による「孤立化」から生じている(39 行目)。つまり、「痛み」によって孤立化している自分を誰も分かってくれないことへの「不満」なのである。よって正解は c である。a は「孤立化」に触れておらず、「苦痛を意識していることの不条理さ」としている点で×。b は「孤立化」→「苦痛(＝痛み)」という因果関係、順番になっている点が×。39 行目より本文における因果関係は「痛み→孤立化→誰も分かってくれない(不公平さ)」である。d も「孤立化→孤立化」となっている点で×。

問十 傍線部 10 の「痛み」は、43～47 行目より「精神物理学的測定法、科学的分析による、客観的な痛み」ではなく「主観的(=生きられている)痛み」である。よって正解は b である。a の「科学的分析ができる～痛み」は真逆で×。c は 41、42 行目にあるが、ここは「客観的な測定法」(44 行目)の説明で×であり、単なる具体例の部分でもあり表面的、部分的で×。d は一見良さそうだが「客観的に評価しても意味をもたない」の箇所が×。48 行目に書かれている通り「客観的に評価することは難しい」のである。言い換えれば「客観的に評価すること自体が難しい」のである。よって d のように「客観的に評価したうえで」という前提はおかしい。

問十一 傍線部 11 の「困難」は 46 行目「～多大な困難があります」、48 行目「～難しく、」、49 行目「～困難なのです。」の部分で説明されているので、これらと選択肢を比較する。a は「主観的評価を～測定できても」が 45、46 行目に矛盾しており、これが「適切でない」選択肢なので a が正解。さらにいえば、「同時に」という語も、本文にはなく、出題者による“ダメ押し”である。出題者はよく、設問を作り終えた後、間違い選択肢で紛らわしくなりすぎたものに、追加で×と判断できる表現を付け加える。b は 43～46 行目より正しい。b の「外部からの測定結果」は 43 行目「圧力や電流を～上げたり下げたりすること」と同義である。c 「言語的表現」は 48 行目に「理解可能な言葉で表現できているか」とあるのでこれも 47、48 行目より正しい。d も「～比較する～方法が存在しない」にあたる内容が 49 行目「～比較可能であるかも理解するのは困難」に書かれており正しい。

《総評》 問題文の内容はそれほど難しくないが、設問がかなり難しい。問二、四、十一は、50%を下回る正答率になるだろう。合格ラインは、11 問中 8 問正答であると予測している。



[出典解説]

『とりかへばや物語』は平安末期の成立。主人公の兄妹は、顔は瓜二つだが、妹の方は性格が男性的であり、男として育てられる(=本問に登場する「権中納言」)。兄の方は性格が女性的であり、女として育てられる(=本問に登場する「妹」)。出題された部分は物語全体では前半にあたるが、この後、数奇な運命をたどりつつ二人の性別は再び入れ替わって、最終的に男性に戻った兄は左大臣関白に、女性に戻った妹は中宮に...というエンディングを迎える。

[口語訳]

(権中納言は)他人に対しては、どんな時でも、親しく話したりなどせず、どこかよそよそしく接してきましたが、この人(=宰相中将)だけはどこか遠ざけておけなくて(権中納言のセリフ=)「そのようなこと(=「注」にあるが、自分・権中納言の「妹」に対する恋心を、宰相中将が打ち明けたことを指す)をおっしゃいますが、一般的に言って口が上手な御月草(=ツユクサのこと。宰相中将を指して言っている。ツユクサの花で染めたものは色があせやすい、移ろいやすいことにかけている)の(恋心の)移ろいやすさは心配ですけど(=ウチの「妹」に対する気持ちだっていつかは...ということ)。(私・権中納言は、あなた・宰相中将に対して)心苦しく思う時々もありますが、(あなた・宰相中将と、私の「妹」との結婚は)

私(=権中納言)自身の思い通りにはならないことです。このように(ただ、あなたの申し出を)お聞きする(しかできない)のが、お役に立てず残念です」と(言っ、権中納言は)先ほどまで嘆きつつ我が身を思い知った名残り(=出題された本文にはないが、この直前の場面で、権中納言が、男として生きている自分の境遇について思い悩む描写があった)で、ひどく物思いに沈んだ(権中納言の)様子は、(...ここからは、権中納言の様子を向う宰相中将の視点=)「(権中納言は)これほどにも心配事など何もないと思われる身でありながら、いったい何に思い悩んで嘆いているのだろう、あまりにも特殊なくらい(女性関係にも)浮ついたところがないのも、きっと何か思うところがあって(そうしている)ようにも見える。見る人(=問五波線部 K にあたる。結婚した相手・妻のこと。「四の君」を指すことになる)に対してだって何か不満があるとも聞いていないが(妻を見るのは)いつものことなので見慣れてしまい別の人のことを思っているのか(ひょっとしたら)春宮(=「注」にもあるが、この「東宮」は女性)のことか、それ(=春宮と交際すること)だって、この人(=問五波線部 L にあたる。「権中納言」を指す)の身であれば特別にありえない話ではないし(それにしても)何か隠し事がある人の格別の嘆きのようにも思えるが」と(いろいろ)推し量りながら(権中納言の)機嫌を窺い、ようようにとりなして(宰相中将のセリフ=)「思っておられることをおっしゃってくだされば、我が身に代えても何としても叶えてさしあげましょう。(ですから、どうか)そんなに御心を隔てることなく(何かを隠したりせず、悩みでも何でもおっしゃってください)」と(権中納言が心を開いてくれないことを)恨んで言うと、(権中納言の側は)答えようもないので(権中納言のセリフ=)「(あなた・宰相中将が)我の身になり代わってくだされば、それは(もう)容易く解決していただければいいですね」と(言いつつ)うち笑い、

(権中納言の歌=)そのことと...=別にこれという悩みがあるわけではありませんが、ただこうして月を見ていると、いつまでこの世に生きていられるのかと悲しくなります(=ただそれだけのことなのです)

(そのような歌で)答えた(権中納言の)声もたいそう趣きがあるように(宰相中将には)感じられて(権中納言に対して一層)親しみを覚えて(宰相中将は)今めかしくぼろぼろと涙を流して、

(宰相中将の歌とセリフ=)「そよやその...=たしかに世の中は無常ですが(だからといって)それほどまでに(あなた・権中納言が)思い悩むのはいったいどういう理由があつてのことなのでしょうか

(私・宰相中将も、我が身が)たいそう罪深いと思ひ知らされまして(あなた・権中納言の)ご様子を見届けて、深山に籠もろう(=世を捨てる・出家)と思ひました」と語ると(権中納言のセリフ=)「それは(私・権中納言も同じ気持ちです)。そう(=出家)思い立ちなされる時は、わたしを置いていかない(=先に一人で出家しない)でください。こんなふうにして何とかして俗世にいたくないと気もそぞろに思う心が、年月に添えて増しているのですが、そうはいつでも(出家は)決断しかねているのです」と、趣深く互いに語り明かして、二人とも(この場を)出て行った(=二人は「男性同士」として、宮中で同席していただけたことなので、最後は二人とも立ち去るのである。どちらかがどちらかを訪問していたわけではない)。(以下は、宰相中将の心理=)この中納言(=権中納言)はあらゆるものが優れている人の中でも、とりわけに心づかいが細やかであるところなど、(もし仮に、この人・権中納言が)女だったとして(自分が)おつきあいさせていただいたとしても(それもまた)素晴らしいことであるだろうなあと(思うくらいに魅力的で、ますます)恋しく思われて(=実際に権中納言は女性であるのだが、宰相中将はそれを知らないのだから、以上のことは、宰相中将の心の中における単なる仮定の話である。)(それによって)ますます妹の姫君のことを思わずにいられないのであった(=宰相中将が同性だと信じている権中納言に抱く好感が、異性だと信じている「妹の姫君」に対する恋愛感情に結びついている)。

[設問解説]

- 問一 「御月草」は権中納言のセリフの中にあり「御」と尊敬語がついているので宰相中将を指す。月草のたとえば〔口語訳〕を参照。自分の「妹」に対する恋心...の話を聞いた直後なので、恋愛に関係するようなキーワードでなければならない。
- 問二 〔口語訳〕も参照。なおこの傍線部は、権中納言から宰相中将に向けたセリフの中にあるため、(自らの悩みなどを含まない)「表面的」な理由にならざるを得ない。
- 問三 「まめやかなる(まめやかなり)」は、実直・浮ついたところがない...ということ。ここでは女性関係のことだが、この時代にあっては、貴族男性が妻以外と関係を持たないというだけでも十分過ぎるほどに真面目と言うことができ、正解はcでよい。dとしてしまうと、宰相中将が「権中納言は妻との間にさえ関係を持たない」というかなり特殊な事情(?)を予め知っている...というストーリーだったことになってしまうが、そのように決められるだけの根拠はない。かなりくだけた言い方をすれば、宰相中将から見て権中納言は「自分と同じような男性であるに違いないが、自分と比べたらビックリするほどマジメ」といった程度のとらえかたをしていた...が、おおむね近い解釈であろう。
- 問四 設問自体が意味するところの理解に少し苦しむが「なぜ権中納言が多く女性に手を出さないのか」の原因として宰相中将の立場で考えてみたときに矛盾のないものを選ぶ...という考え方をしてみる。まず「(妻である)四の君との関係がよくない」という「悩み」だったと仮定すれば、その結果は「四の君以外の女性に所に行く」になるであろうから、これではあわない。では次に「東宮との関係に悩む」だったと仮定すると、それは「恋心を打ち明けられないでいる」という「悩み」だったことになり、それならば「(他の女は目もくれず)女性に手を出さない」ことの(宰相中将にとって納得できる)理由として矛盾がない。
- 問五 〔口語訳〕で確認のこと。
- 問六 宰相中将に対して、権中納言は「悩みなど特にない」と答えるしかないわけだから、これだけでもa・bは違うとわかる。dの「琴」は全くの無関係。
- 問七 これに続く箇所「出家」の話をしている。ここに繋がるキーワードを選べばよい。「常なるまじき」と「無常」は似すぎているために、かえって選びにくかったかもしれないが、そのままでもよい。
- 問八 「さ」が指すのは「出家」。「遅らしたまふなよ」は、私を遅れさせない(=後に残して先に出家しない)でほしいよ...ということ。

問九 Pは「助動詞ず已然形」。この意味は「打消」しかない。問題はQだが、これは「助動詞る」(活用形は連用形)。意味は、dにある「尊敬」かeにある「自発」が候補だが、「(妹の姫君への)恋心が募らずにいられない」という文脈を考えれば「自発」と決まる。

問十 a「閑吟集(かんぎんしゅう)」は室町時代後期の歌謡集。b「梁塵秘抄(りょうじんひしょう)」は平安時代末期に後白河法皇の手によって編まれた今様の集成であり、これが正解となる。c「懐風藻(かいふうそう)」は最古の漢詩集で奈良時代である。d「玉葉和歌集」は鎌倉時代後期の勅撰和歌集である。

目

[作者について]

斎藤拙堂(さいとうせつどう)は、江戸時代後期の文章家。

[設問解説]

問一 1=「之(これ)」が指すものは「徑(けい)」であり、径(みち・道)のこと。「夾」は「夾(はさ)む」である。たくさんの梅の花が、谷間の散策の道を「挟んで」いるのだから「谷の両側に梅花が咲いている状態」である。3=「与」の位置が問題である。「与」は「と」であるが「山と谷川」ではない(それならば「谿与山」という語順になる)。だとすれば「省略されている何か」と「山や谷川」...ということになるが、山の巔(いただき)に達し見下ろした時に視界に入ってくるものは(この文章の主題でもある)「梅花」であろう。加えて傍線部直前にある「皜然」に「白いさま」と注があることもヒントになる(=梅の花は白)。cの「白雲」ではまずい。数百歩で登れるような山の頂上から「下顧」(=見下ろす)しても実際の白雲は視界に入らない(後述するが、傍線部の後に出てくる「白雲」は「梅花」をたとえていったものであり、実際の白雲ではない)。4=「輒(すなは)ち之(これ)を詢(と)ふ」とよむ。伊賀からきた人に問うのは梅の開花状況「だけ」で充分であろう。「月の満ち欠け」の方は、伊賀の人にわざわざ訊かなくても日本全国どこでも同じであり筆者は自分でわかる。またdのように「いつ行けばよいか」を問うても、人によって基準がまちまちになってしまう。筆者は、梅の開花が自分の理想とする月と一致するときに月ヶ瀬に行ってみたいわけである。

問二 ここでの「白雲」は、谷間の道の両側を挟むようにして咲き誇るたくさんの梅花をたとえていったもの。

問三 筆者は、筆者にとって理想的な月と梅花のセットが見てみたいのである。まず正解のaならば、これと齟齬がない。cのように理想の月を「満月」と特定するのは誤り。実際に筆者が月ヶ瀬を訪れたのは満月(=望)から三日遅れ...である。またd「つねに時差」もあわない点がある。むしろ毎年のように春分の数日前に「盛開」になるパターンが「お決まりだった」からこそ、筆者が理想とする月と梅花のタイミングには、なかなか実現しなかったのである。

- 問四 「如...何」で、「...を如何(いかん)せん」とよむことになり、これだけでcときまる。
- 問五 「如何せん」は「どうしたらよかろうか(いやどうしようもない)」という反語。bでもよさそうだが、「月が出ていないなら行く意味がない」という筆者の思いにあうのはaの文脈。
- 問六 「離披」は「りひ」とよみ、(花の)満開のこと。筆者がこの箇所であらゆる念頭においている邵雍(しょうよう)の詩句「花を賞するに慎みて離披に至る勿(なか)れ」は「花は満開にならないうちに鑑賞するのがよい。物はいまだ絶頂に達しない段階をもってよしとすべきである」といった意味。正解となるc「爛漫(らんまん)」は、花が咲き乱れていること。「春爛漫」などのように使う。
- 問七 意外なことに花はよかった...のに、月の方がだめだった...わけである。「月が満月でなかった」のがだめというなら満月の日(=望・旧暦十五日)に出掛ければよかっただけの話になってしまい、よってcはちがう。bかdということになるが、b「花見には適さない状況」とは、筆者にとってのこと...というよりも、文字通りに読めば「一般的に言って」という意味を表すであろう(筆者以外の人にとっては「月」はそこまで花見に関係するわけではない)。
- 問八 望(満月)は十五日(=旧暦では満月は十五日)。文中に「望後三日」とある。

その他の大学・学部の解答解説はコチラ！

増田塾 2019 解答速報ホームページ 

早慶上智・GMARCH・関関同立などをはじめとした難関大学の解答解説を随時公開していきます！